

近代石清水（男山）八幡宮の存在意義について

—「第二の宗廟」という存在を中心として—

山 本 憲太郎

歴史学の分野において文化財についての研究は、戦前より数多く行われており、また文化財保護の運動も多くの歴史研究者や研究会などが中心になって行われている。

筆者の専攻する日本近現代史において、文化財が果たした役割として第一にあげられることは、近代国民国家形成期に国民統合を行ううえで欠かすことのできないものであったことである。

一方、文化財保護という点で見ると、自分たちの身近にある文化財を知ることが何よりも必要である。しかし、全ての人々が自分たちの身近にある文化財の歴史について知っているとは限らない。

また、その身近にある文化財の歴史についても十分に説明されていないことも多い。これは、本稿において取り上げる京都府八幡市に鎮座する石清水（男山）八幡宮についても同じことが言える。文化財という意味で考えると、石清水八幡宮もまたその一つである。

筆者の管見の限りでは、近現代史上における石清水（男山）八幡宮の先行研究は、決して多いとは言えない。また、八

幡市が昭和五十二年（一九七七）に市制を記念して発行した『八幡市誌』においても、石清水（男山）八幡宮についての記載はわずかしかない。しかし、この時期の石清水（男山）八幡宮は、明らかにすべきことが多くある。

本稿においては、その石清水（男山）八幡宮の歴史について見ていきたい。対象とする時期は、慶応四年（一八六八）から男山八幡宮が石清水八幡宮に改称される大正七年（一九一八）までとしたい。（石清水八幡宮は、明治初年に男山八幡宮と改称される。このことは、後に触れたい）そして、石清水（男山）の鎮座する綴喜郡周辺の人々にとって、石清水（男山）八幡宮は、どのような存在であったかということも併せて考察していきたい。

石清水八幡宮は、京都府八幡市男山に鎮座している。石清水八幡宮が男山に鎮座するきっかけは、貞観元年（八五九）に奈良大安寺の僧である行教が、豊後の宇佐八幡宮で修業する姿に八幡大菩薩が感動し、行教にその分霊を都の近くに移座するようにと託宣したことからであった。

石清水八幡宮の特徴として有名なのは、神社と神宮寺が一体という宮寺であったことである。その証拠に、祭神が「八幡大菩薩」であり、宮寺の名称は「石清水八幡宮護国寺」であった。後に、祭神は応神天皇・比咩大神・神功皇后と定められた。応神天皇は、厄除の神・安産の神・産業の神として知られ、神功皇后も安産の神として知られている。また、石清水八幡宮は、早くから伊勢神宮に次ぐ、日本で「第二の宗廟」であると言われていた。

あと、神功皇后は、新羅に出兵の際、八幡大神に助けられたという伝説があり、そのことから戦の神としても知られている。この戦の神という存在が、その後の石清水八幡宮の存在に影響を与えることになる。

その戦の神ということから、清和源氏の血を引く、源氏・足利氏・徳川氏の各將軍家の崇敬を集めることになる。それは、足利義満の生母が、石清水八幡宮の社務を務めていた善法寺家の血縁者であることや尾張徳川家の祖、徳川義直の生

母が、石清水八幡宮祠官の田中家の出身であることが、そのことをよく表している。

石清水八幡宮は、多くの箇所から寄進を受けており、古来より経済的に非常に裕福であったが、元禄期（一六八八～一七〇四年）の石清水八幡宮の朱印地を見てみると、七千石を超えていた。しかし、その当時においても諸大名の寄進や社僧の私有財産などがあつたため、実際はこれより多くあつたと考えられる。

江戸時代末期になると、文久三年（一八六三）の孝明天皇の攘夷祈願や慶応四年（一八六八）の鳥羽伏見の戦いに巻き込まれるなど、石清水八幡宮も時代の波に飲み込まれることになる。

慶応三年（一八六七）の王政復古の大号令をきっかけにして、石清水八幡宮は衰退の道を歩むことになる。それは、明治四年（一八七二）に行われた上地令などが、そのよい例だろう。

また、明治初年に行われた石清水八幡宮における神仏分離や石清水八幡宮社務家と周辺の人々との対立も大きな変化の一つであった。そして、これらのことは、激変と言つてよいものであつた。それに加え、石清水八幡宮という名称も、男山八幡宮と改称されることになる。

衰退の道を歩んでいた男山八幡宮であるが、男山祭と人々の信仰が辛うじて、その存在意義を支えていた。

朝廷から勅使を迎えていた石清水祭も、明治政府の政策のために、「官祭」から男山八幡宮の「神社の祭」として変容した。しかし、男山八幡宮は、この男山祭に並々ならぬ決意で行つていた。

その後、皇室の「伝統」を創造し、「旧慣」の保存のため、男山祭は明治十八年（一八八五）に限定つきであるが、復興された。

男山祭が復興されてからも人々の信仰は続いていたが、上地令をきっかけとして始まつた男山八幡宮の経済状況は変わ

ることなく続いた。

また、人々から信仰はされたものの、「第二の宗廟」としての存在感を充分に発揮することができず、また行政からの支援をされることなく、男山八幡宮は二十世紀を迎えることになる。

明治三十七年（一九〇四）日露戦争が始まると、男山八幡宮には多くの人々が武運長久のために参拝に訪れた。

綴喜郡周辺の町村においても戦争を推進する形がとられ、男山八幡宮関係者も戦争必勝祈願、出兵兵士への守札授与などの活動を行った。

日露戦争時における男山八幡宮の動向は、戦争を推進するものであったが、同時にこれまで衰退の道を歩んでいた男山八幡宮の存在を再確認させることになった。それは、戦争推進以外の面においてもある。

そのことを特に表すものとして、男山八幡宮田中俊清宮司は、戦争負傷者が入院している大阪予備病院に慰問をしようとしたことや男山八幡宮に参詣した出兵兵士が傷病を負った場合には、慰問状や見舞品を郵送したことがあげられる。

そして、この他にも男山八幡宮は多くのことに対して、配慮を見せていた。これらの活動は、後に京都府などから、特に顕著なものであったと認められることになる。

これらの活動によって、男山八幡宮は多くの人々に再認識され始めたが、それは、これまであげた男山八幡宮の活動、そして、男山八幡宮の存在を認識させることのできる場所に恵まれていたことがあげられる。

その場所とは、山崎駅のことである。男山八幡宮が出兵兵士に授与した守札の数は、約三十万枚であった。そして、その約八割にあたる二十三万枚もの守札は、山崎駅に停車中の電車に乗車している出兵兵士に授与されたのであった。その場所に恵まれたお陰で男山八幡宮の存在を高める理由の一つだった。

日露戦争時における男山八幡宮の活動において、これまで一線が保たれていた人々との関係が変わることになる。それは、男山八幡宮という「ブランド」が新たな芽生えを見せ始めたと言ってよいだろう。

日露戦争後の一九一〇年代においては、明治天皇の崩御、大正天皇の即位大礼などの大きな出来事が生じた数年であった。特に学校関係者や軍人会関係者は男山八幡宮を訪れ、明治天皇の病氣回復を願っていたことや大正天皇の即位大礼において、多くの寄付行為などが行われ、男山八幡宮が国と人々を繋ぐ役割を果たしていた。これは、従来の説と同じである。

しかし、これらの出来事が起きていない時期を見てみると、綴喜郡やその周辺の人々は男山八幡宮を「ブランド」として有効に活用することができなかった。いや、できる環境になかったと言ってよいだろう。

それは、この時期の男山八幡宮と他の神社の社入金との比較で分かったことである。日露戦争時においては、他の神社に比べて、多くの参詣者が訪れていた男山八幡宮であったが、この時期においてはそうではなかったのである。参詣者は増えてはいたものの、日露戦争時に比べると、少々寂しいものであった。

その理由としては、男山八幡宮の周辺に魅力を感じさせる施設・名所などが存在しなかったからである。神社仏閣や多くの産物店などが存在している京都の街に比べて、綴喜郡は決して多いとは言えなかった。このことは、人々を否応なしに神社へと向かわせていた時代と違うことを物語っている。

しかし、男山八幡宮関係者はこの時期を見逃さなかった。男山八幡宮周辺に魅力を感じさせるものがなく、日露戦争時に比べて参拝者は減少したとしても、男山八幡宮が石清水八幡宮であるという事実が知られていないことなどを十分に活用した。そして、その活用が石清水八幡宮への改称となったのである。

そして、この改称を機会に綴喜郡関係者も石清水八幡宮の存在を有効に活用することになる。その始まりが、『名勝録 附天然記念物』なのである。その中の名勝録などに、石清水八幡宮やそれに関するものを取り上げられているのであった。以上が、本稿において筆者が考察したことであるが、石清水（男山）八幡宮について、解明すべきことはまだまだある。